

審査の結果の要旨

論文提出者氏名：菊地翔太

この課程博士学位請求論文の審査委員会は、(主査) 松本和子、(副査) 小林宜子、川崎義史 (以上、東京大学大学院総合文化研究科)、福元広二 (法政大学)、寺澤盾 (青山学院大学) の5名からなる。公開審査は令和5年5月28日(日)15時から17時まで、オンライン(Zoom)で行なわれた。論文題目は *Relativizers in Shakespeare and Fletcher: Exploring Implications for the Authorship of their Collaborative Plays* (ShakespeareとFletcherにおける関係詞—二人の合作のオーサーシップへの示唆を求めて) である。以下、審査結果の要旨を報告する。

菊地翔太氏の博士論文は、初期近代英語期(1500-1700)の劇作家である William Shakespeare (1564-1616) と John Fletcher (1579-1625) の劇作品を対象に、関係詞の体系に見られる様々な変異・変化について多角的に調査を行い、二人の言語を通時的・共時的な視点から記述したものである。本論文の背景には、近年の歴史社会言語学の研究成果の蓄積や演劇の大規模コーパスの公開があるが、伝統的な文献学研究の手法が軸になっており、コーパスを補助的に利用している。さらに、本論文は関係詞の使用に見られる各作家の特徴が二人の合作であると考えられている *The Two Noble Kinsmen* (1613) と *Henry VIII* (1613) においてどのように表出するかを示し、合作のオーサーシップについて新たな知見をもたらすことを目指している。

本論文は6章で構成されている。第1章では、研究の背景、先行研究、分析の対象と方法について説明がなされる。第2章から第4章は、Shakespeare と Fletcher の単独執筆作品から得られた結果を基に、二人の関係詞の使い方について多面的に考察している。

第2章では、関係詞の全体的な分布について、特に先行詞の種類(人間 vs. 人間以外)と関係節の種類(制限節 vs. 非制限節)の観点から論じられている。第3章は、四つの文法機能(主格、目的格、前置詞の目的語、属格)を区別し、関係節内での関係詞の文法機能に着目した調査がなされている。各文法機能における関係詞の使用状況を俯瞰するだけでなく、通時的・共時的観点から注目し値する用法(e.g. 主格ゼロ関係詞、主格の *whom*、目的格の *who*, *where* 複合語(e.g. *wherein*), 前置詞残留)について用例に基づく分析がなされている。第4章では、初期近代英語に特徴的な関係詞の用法が扱われている。名詞節を導く関係詞(e.g. *what*, *that which*, *that that*, *that*)、関係形容詞の *which*、関係詞の後に従属節が続く特殊な関係節、関係詞として使われる *as* が取り上げられている。

調査の結果、以下のような特徴が浮かび上がった。Shakespeare は文語的な使用域に特徴的な *wh* 関係詞を好み、当時形成されつつあった規範に縛られることなく自由奔放に用いている。新しい形態(e.g. *who*, *that which*)だけでなく、古い形態(e.g. *the which*, *whereof*)もレパートリーの重要な一部であり、表現の幅が広いことが明らかになった。一方、Fletcher は口語と強く結びついた表現を重用する傾向がある。特に、ゼロ関係詞の使用が目立って

おり、その頻度はどの文法機能においても当時の水準を大幅に上回っている。wh 関係詞については、全体的に使用頻度が低い、使用する形態や環境が比較的限定されているという点において標準化の傾向を示している。Fletcher は、古い形態である the which の代わりに which のみを用いていることや、who は人間の先行詞にのみ、whom は目的格と前置詞の目的語の機能にのみ用いていることが示される。

第5章は、前章までの調査結果を踏まえて、二人の合作における関係詞の使用状況を考察している。二人の際立った特徴がそれぞれの担当箇所に見れていることを明らかにし、関係詞の観点から従来の執筆分担説を裏付ける新たな証拠を提示している。同時に、今後慎重な検討が求められる箇所を指摘している。

*The Two Noble Kinsmen* では、二人の作家の特徴がそれぞれの担当箇所に明確に見れていることが示された。Shakespeare 担当箇所では、wh 関係詞が頻用されており、Shakespeare との結びつきが強い the which, where 複合語, that which 等の多様な形態が活用されている。また、wh 関係詞の使用範囲が広く、人間以外の先行詞と共に使われる who や無生物の先行詞を修飾する whose の用例が報告されている。Shakespeare に特徴的な二つの指標が組み合わさった例 (i.e. the which と wh to-infinitive construction [to 不定詞節が関係詞に後続する構文]) も確認された。一方、Fletcher 担当箇所では、that とゼロ関係詞の使用が顕著であり、wh 関係詞は存在が希薄である。wh 関係詞は使用される形態や環境が限定されており、Shakespeare 担当箇所では使用されていた who, the which, where 複合語, that which などの形態は一度も用いられていない。本調査の結果は、二人が明確な役割分担に基づいてこの作品を執筆したのではないかという仮説を裏付けるものである。

*Henry VIII* においても、概ね同様の傾向が見られるが、従来の執筆分担説の再考を促すような用例が確認された。Shakespeare の顕著な特徴である、主格の whom、無生物が先行詞の whose、wh to-infinitive construction が Fletcher 担当箇所に現れることを指摘し、二人の間でより複雑な形態の合作が行われた可能性を検討している。具体的には、Shakespeare が Fletcher 担当箇所に部分的に関与している可能性や、場の中で担当が切り替わった可能性について議論がなされている。少数の用例であっても従来の仮説の見直しに繋がることや、小さな証拠の蓄積が学界を刺激し、よりよい仮説の構築に繋がりうることが示された。

第6章は、本論文がもたらした知見を整理し、今後の展望について議論している。

以上が本論文の概要であるが、初期近代英語期の劇作家である Shakespeare と Fletcher の作品を対象に、関係詞の体系に見られる様々な変異・変化について多角的に調査を行い、二人の作家の言語を通時的・共時的な視点から記述すると同時に、関係詞の使用における両作家の特徴が、合作とされている *The Two Noble Kinsmen* と *Henry VIII* のオーサーシップについて新たな証拠を提示している点がいずれの審査委員によっても高く評価された。本論文では、3つのコーパス (main corpora, extended corpora, VEP drama corpus) が使用されており、合作が行われた時代の作品だけでなく、Shakespeare 全作品や初期近代英語期全体の劇作品と比較することにより、2人の劇作家における関係詞の特徴がより鮮明となり、初期近代英語における関係詞研究に大いに貢献するものであるという意見があった。著者推定に関しては、計算機を利用した計量的手法が主流である一方、計算機では扱えない(ある

いは扱いづらい) 現象も存在するが、本論文はそうしたものに關しても、丁寧に議論することによって新たな知見を広げることができたとの評価があった。さらに、本研究は初期近代演劇における多様で複雑な合作の有りさまを浮き彫りにしたが、これは近年の本文研究の諸論考の結論とも合致するものであり、そうした議論に言語学的立場から寄与するものであるとの指摘もあった。

一方で、本論文には以下のような問題点も指摘された。まず、定量分析に統計的手法を加えている点は評価できるが、トークン数の少ない言語変項に関しては統計解析は不適切であるため、他の観点からの考察を加える必要があるという論評があった。また、本論文では関係節の使用法から作者の区別ができると主張しているが、そもそも関係節にどの程度の作者弁別性があるのかは自明ではないため、他の作品や作家でも検証することが望まれるという指摘もあった。オーサーシップを論じる際には、芝居原本を記した写字生、印刷用稿本の作成者、印刷本の編者、植字工、印刷工、校正者など複数の無名・匿名の人物の関与についても考える必要があるが、本論文でもこの点は意識されているものの、十分に議論されているとは言えないという論評もあった。さらに、合作の問題をさらに深く考察していく際はエリザベス朝からジャコビアン時代にかけての合作作品を広く見ていく必要があるとの意見も出た。

こうした指摘はあったものの、菊地氏の論文は初期近代英語期における関係詞に関するより詳細な研究に発展していく期待が感じられ、また、関係詞以外の言語変項の考察にも着手することで、より多角的な視点から各作家の言語変異や作品のオーサーシップの考察に繋がる可能性があり、将来への新たな研究の萌芽を秘めている。さらに、本研究は書誌学や文学研究との学際的な連携も視野に入れていくことで更なる発展の余地があり、全体として学術的な価値が高く、この分野における優れた研究成果として十分に評価に値するものであると言える。したがって、本審査委員会は博士(学術)の学位を授与するにふさわしいものと認定する。